

日本歴史地理学研究会創設のころ

菊地利夫



歴史地理学会の前身である日本歴史地理学研究会は、昭和33年4月29日に日本大学において設立発起の会を開催した。ここから会が正式に出発した。その前年には、研究会設立に向けての趣意書を私が作成した。趣意書は謄写版で刷り、各地におられる歴史地理学に関心を持つと思われる人々あてに郵送し、賛同者を募った。

当時は歴史地理学の専門誌がまだ存在しなかったもので、他の雑誌などに歴史地理学やそれに類する論考を発表している人を選び、趣意書を送った。趣意書に対し賛同の意を表してくれる人があると、その人の周囲にいる歴史地理学に関心をもつ人をさらに紹介してもらい、趣意書の送付を追加した。私は西日本の状況がよくわからなかったもので、京都大学や立命館大学出身者に相談しながら趣意書の送り先を決めたように思う。

そのころの地理学や歴史地理学を取り巻く環境として、まず、日本における歴史地理学研究の「初代」ともいうべき喜田貞吉、吉田東伍や小川琢治の存在があった。これらの方々の基本的立場は歴史学や自然地理学であった。上記の方々は歴史地理学的事象を取り扱ったが、位置づけとしては日本の歴史が展開した「舞台」への関心であったように思う。それに次ぐ「2代」目といえるのが内田寛一や東北の古田良一で、当時、現職の最年長者として残っていたころであった。この方々は、おそらく日本で最初に大学で「歴史

地理学」と題する講義をおこなったことになるとではないか。次いで「3代」にあたるのが小牧實繁であろう。小牧は、岩波のシリーズに歴史地理学を執筆した。「4代」にあたるのは、日本における歴史地理学上のテーマを具体的に取り上げた岩田孝三、喜多村俊夫、浅香幸雄であろう。織田武雄、米倉二郎、矢嶋仁吉も同様で、それぞれ各テーマの研究の創始者ともいえる方々である。「4代」にあたる方々は、そのころ既にこまごまとした学会の実務をやらなくてよい立場になっていた。そこで、その次のいわば「5代」目にあたる人たちが研究会を作ろうということになった。その「5代」目のなかの1人が私であった。

昭和30年代には外国の歴史地理学理論が日本に紹介され、たくさん読まれた。「5代」目にあたる人たちはそれらを読んでいたもので、歴史学と歴史地理学の違いがはっきり主張できるようになった。こういった考えの人々が各県で個別に活動しているもので、一つにまとまり、互いに協力していこうということで全国的研究会創設への動きとなった。当時は、大学出身者のほかに、文部省の検定試験に合格して資格を得た地理の教員が各地で活躍していた。そのなかには郷土の地理や歴史を熱心に研究している方がかなりおられたので、その方々にも研究会への参加を呼びかけた。さらに、社会経済史分野の人々にも呼びかけた。

この時期に新たに歴史地理学の全国的な研究会の設立が必要となった理由が、もう一つある。当時、我々が研究成果を発表する主要な場は日本地理学会であった。しかし、歴史地理学を研究する立場からみると、昭和30年

前後の一時期は日本地理学会の役員構成に偏りがあったといわざるを得ない。このころの日本地理学会では地形を中心とする自然地理学者の活躍は目立ったが、人文地理学側の役員は公正な判断力がある人ばかりとはいえないように感じられた。そのことが地理学評論の編集委員構成に現れており、この時期の地理学評論の審査体制では歴史地理学研究に対して適正な評価を下すことができない状況と思われた。また、別の学会として大塚地理学会があったが、こちらでは地誌学の発表が主流であり、やはり歴史地理学研究の発表の場としてふさわしいとはいえなかった。このような問題が横たわっていた時期に、経済地理学の分野では経済地理学会が創設される運びとなった。ほぼ時を同じくして、歴史地理学においても発展を目指して立ち上がるべきと考え、同志を募り、会を発足させた。

会の設置に向けて、三友国五郎、中田榮一各氏らと協議をした。籠瀬良明氏にも仲間に加わってもらおうと頼んだが、事情があるとのことで、設立当初は会には入ってもらえなかった。内田寛一、小牧實繁、古田良一の三先生は鼎立している感があり、あちら立てればこちら立たずとなって礼を失するおそれがあったので、会を設立する話は準備段階ではもちかけなかった。三先生には、会の発足にあたって顧問になっていただいた。会の発足後、内田氏は何度か大会・例会に見えた。小牧氏は、藤岡さんが会長の時に、懇親会に見えたことがある。古田氏は、参加したことがほとんど無かったように思う。

昭和33年に会が創設された当時、会員数は百数十名ほどであった。そのころ、会には会長をおこななかった。これは、もしも会がつぶれるようなことになったら、会長を引き受けてくれた人に申し訳ないと思ったからである。会には常任委員長をおき、当面、私が務めた。発足後、数年して会員がおよそ二百数十から三百名になったので、これなら大丈夫

であろうということで浅香幸雄氏に会長就任をお願いした。浅香さんは畠山財団と交渉して、継続的に助成金を獲得する道を拓いてくださり、会の財政健全化に貢献された。数年後、浅香さんから会長をやめさせてほしいとの申し出があり、一般の委員なら協力できるということで、常任委員を引き受けていただいた。

浅香さんに代わる新たな会長は、西日本の方をお願いすることになった。そして、藤岡謙二郎氏が会長を引き受けてくださった。藤岡さんの次の会長は米倉二郎氏が引き受けてくださった。藤岡さんや米倉さんは西日本在住の歴史地理学研究者を多数発掘され、入会を勧めてくださったので、この時期に会員が大幅に増加した。藤岡さん・米倉さんが会長のころに、会員数が五百名に達したと記憶している。こうして、我々「5代」目からみて「兄貴分」の人たちが、会長として会を軌道に乗せ、安定化することに協力してくださった。それ以後は、投票により会長を決めることにしたと思う。

会の実務において、会員通信の発行や事務管理など中田榮一氏の協力が大きかった。他にもたいへん多くの方々との協力があつた。その一方、会を設立したことに対し、当時の複雑な人間関係から「お前は憎まれているよ」などと忠告してくる人もあつた。また、人によっては、声をかけても協力が得られないことがあつた。しかし、直接的に会の設立や運営に反対する動きは無かつた。会の発足後、日本地理学会の席で田中啓爾先生にお会いする機会があつたが、田中先生は私と握手をして「菊地はえらい」と述べられた。

歴史地理学会が発足して50年を迎える。今考えてみると、私が歴史地理学会を創立しようと思つたのは、そのころ世界において多くの科学が大転換はじめていて、歴史地理学がその動向におくれることを心配したからである。50～60年前から「科学構造の革

命」(パラダイム・シフト)が世界にひろまった。詳しくは、佐賀大学で開催された歴史地理学会40周年記念講演(編集委員会注:「歴史地理学」40巻1号,28~40ページ掲載)における私の主張を聞いて欲しい。

私は、伝統的な絶対空間の歴史地理学をパラダイム・シフトして、日本でも新興の歴史地理学をはじめようと呼びかけた。

どの民族もそれぞれのフィルターをかけて地表面に地域(景観)をつくっている。地域(景観)は民族心理の表れである。同じ空間に対し、歴史心理をもって時の断面上に異なる地域(景観)をつくっている。もはや空間は絶対的なものではなく相対的である。歴史

地理学は、歴史の地理的解釈であるとか現在を理解するための過去を考えるとか現在は過去の堆積であるなどと考えるよりも地域(景観)の変化・変遷と規定すべきである。パラダイム・シフトすれば、空間は多面的に展開すると考えている。

(名誉会員)

注:本稿は2006(平成18)年6月17日に実施したインタビューの要約である。インタビューの聞き手は中西僚太郎(千葉大)と小口千明(筑波大)が担当し、文章化は小口がおこなった。